樋口真吉顕彰会・会報誌

発行人
会長　安岡　明
文責
寺尾　敏夫

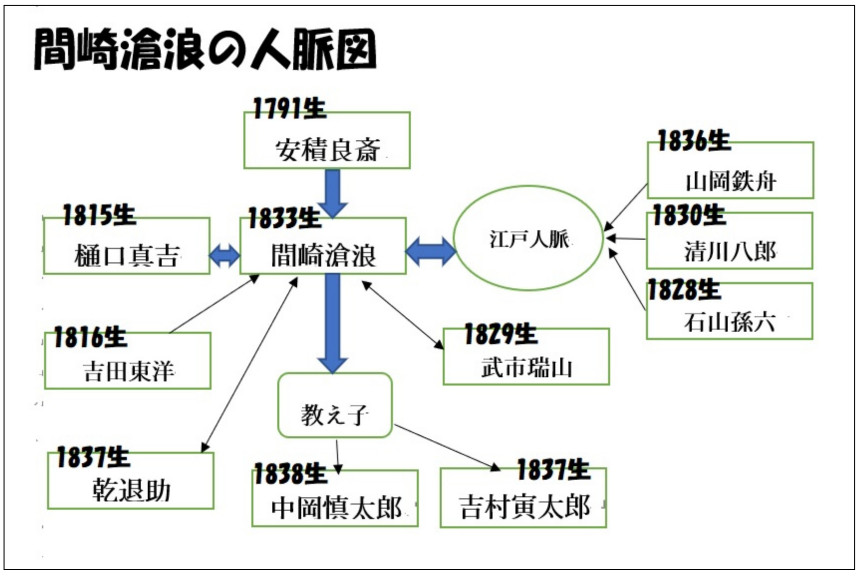
樋口真吉人脈からみえてくる幕末の土佐藩

土佐藩の討幕は間崎滄浪の人脈から始まった！

薩土密約と薩土盟約

昨年十一月二十八日に四万十市予土会主催の歴史講演会で『幕末維新にいたる「大政奉還期」の樋口真吉の人脈』と題して沢田勝行理事が講演をされた。その内容が多岐に渡るためその中の幾つかのエピソードを紹介します。

●間崎滄浪は中村の江ノ村出身の医師を父として、高知に生まれ、少年期に三年ほど中村に住んでおり、中村に縁がある人物である。十六歳で江戸にでて著名な朱子学者安積良斎の塾に学び塾頭を務めた秀才であった。交流範囲も広く、山岡鉄舟、清川八郎、石山孫六らがいる。石川孫六が土佐藩に請われて土佐に向かう時、滄浪は樋口真吉を紹介している。特筆すべきは間崎滄浪が早い時期に乾退助と親しい関係にあったことである。嘉永五年樋口真吉が長崎経由で江戸に滞在した時、頻繁に真吉と滄浪は交流していた。真吉も遠近晋八も安積良斎に学んでいる痕跡があるからだ。しかし真吉は日記には間崎滄浪の名前を伏せている。恐らくは後に滄浪が清連院宮事件で容堂公から「不遜の極み」と切腹させられたことが関連しているとみていい。真吉の残した記録は個人の日記とは性格が異なり、公文書に近い記録だからである。左上の図で注目すべきは間崎滄浪の教え子に中岡慎太郎と吉村寅太郎が居ることである。乾退助と中岡慎太郎が薩土密約を成立させ土佐藩を討幕派に導く先陣を切ったこと、吉村寅太郎が十津川事件を起こしたことの背後に勤皇家間崎滄浪がいたのである。



●江戸で真吉が滄浪に出会っていたことを立証する痕跡がもう一つある。滄浪は切腹間際に米国に行きたかったと書き残している。これは真吉が長崎で土佐藩の誰よりも早く万次郎に面談して米国事情を聴取していたから、江戸にて滄浪に当然伝えたであろうことが想定されるからである。真吉から聞いた米国事情が間違いなく間崎滄浪に渡米したい気にさせたのである。

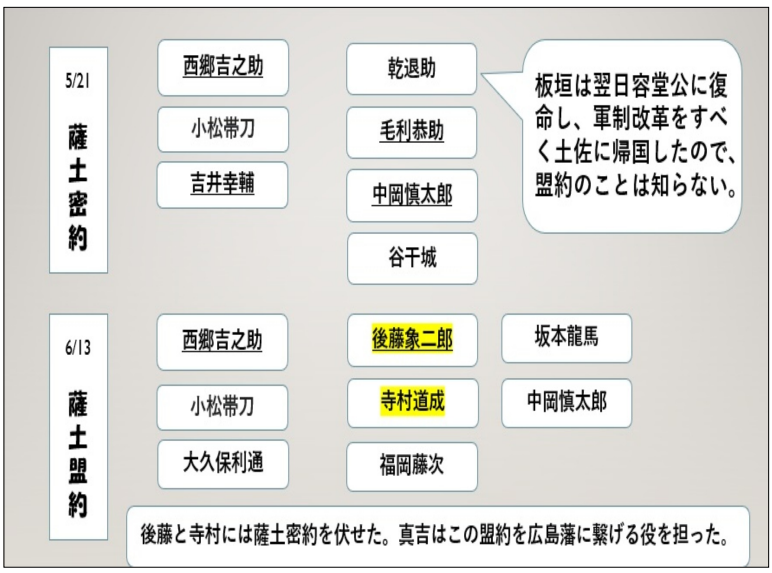
薩摩と密約を画策

●文久三年六月八日、間崎滄浪は切腹した。その二ヶ月後中岡慎太郎が乾退助を訪問し、これが後に薩土密約を結ぶ端緒となった。年齢が近いこともあるが共に間崎滄浪から勤皇思想を受け継いだ間でもあった故であろう。

●慶応三年五月、江戸にいた乾退助は在京の中岡慎太郎より四賢候会議の不発を嘆く手紙を受け急遽五月十八日上洛するや、京都の料亭「近安楼」にて福岡藤次、船越洋之助らと武力討幕の打合せの密談をおこなった。翌日、乾退助は山内容堂に拝謁を請うが許可されず、この日、中岡慎太郎は薩摩藩・西郷隆盛と乾退助を会見させようと奔走する。慶応三年五月二十一日、京都の料亭・大森で再び乾と中岡が策を練り書簡をしたため西郷に送った。

●薩土密約

この中岡の仲介により、同日夕方、室町通り鞍馬口下る西入森之木町の近衛家別邸（薩摩藩家老・小松帯刀の寓居）において、土佐藩の乾・



谷干城・毛利恭助・中岡らと、薩摩藩の西郷吉之助（隆盛）・吉井幸輔（友実）・小松帯刀らが会談し、乾は「戦となれば、藩論の如何に関わらず、必ず三十日以内に土佐藩兵を率いて薩摩藩に合流する」とその決意を語り、薩土討幕の密約（薩土密約）を締結した。薩土密約を仕掛けたのは土佐藩の乾退助であったのである。

●容堂公へ復命

いくら何でも乾退助が勝手に薩摩藩と密約をする訳にはいかない。翌五月二十二日に、乾退助はこれを山内容堂に稟申し、同時に勤王派水戸浪士を江戸藩邸に匿ったことも報告した。容堂はその勢いに圧される形で、この軍事密約を承認し、退助に軍制改革を命じた。

●土佐藩は乾を筆頭として軍制改革・近代式練兵を行うことを決定。乾退助は、五月二十七日、中岡慎太郎らに大坂でベルギー製アルミニー銃300挺の購入を命じ、六月二日に土佐に帰国した。

●中岡慎太郎は乾退助の武力討幕の決意をしたため書簡を、土佐勤王党の同志あてに送り、土佐勤王党員ら三百余名の支持を得ることになった。これがのちの迅衝隊の主力メンバーなるが、旧土佐勤王党員らを赦免することにつながった。この一部始終を樋口真吉は容堂公の側近として見ていたのである。直ちに幡多勤皇党へも迅衝隊への参加を指示したと思われる。

和戦両様の容堂公

●「薩土盟約」

実は容堂公の気持ちは揺れ動いていた。一方で後藤象二郎らの大政奉還策を幕府に進言するつもりでいたからである。中岡慎太郎、乾退助らによって薩摩藩とは討幕の密約を結んだものの山内容堂は、徳川宗家への強い恩顧意識があり、心中の揺れ動きの幅が大きく、討幕への意欲が不安定であったため、更に幕府の力を段階的に削ぐための方策として六月二十二日京都三本木料亭「吉田屋」において、薩摩の小松帯刀、大久保一蔵（大久保利通）、西郷吉之助、土佐の寺村道成、後藤象二郎、福岡藤次（福岡孝弟）、石川誠之助（中岡）、才谷梅太郎（坂本龍馬）との間で、大政奉還の策を進めるために薩土盟約が締結された。

その会談に加わったメンバーが前頁の資料の通りである。

●乾退助は土佐に帰ったので居ない。土佐藩側に後藤象二郎、寺村道成に加えて坂本龍馬と中岡慎太郎が変名で参加しているのである。寺村道成の日記には「巨魁二名」と書いて龍馬と慎太郎の名前を載せていない。ここに当時の土佐藩の門閥主義が象徴的に現れている。つまり土佐藩の上層部は郷土の坂本龍馬と中岡慎太郎を認めていないのである。

●この薩摩藩との会談内容は「薩土盟約」とされて、これに芸州広島藩を巻き込んで三藩連合を画策したもので、芸州との折衝を樋口真吉が担当し、芸州藩家老に複数回面談している記録がある。実際には三藩連合の目論見は実現しなかった。ただ、薩土盟約の内容は武力討幕派の乾退助には知らしていないばかりか、後藤象二郎と寺村道成には薩土密約を知らしていないという土佐藩の複雑な事情が出ている。明治維新が成功した歴史を知っている我々からすれば奇異に感じるも、当時の事情からは政権がどう動くのか誰にも分からない疑心暗鬼のなかで、暗中模索していた土佐藩の苦衷が見えているのではないだろうか。

当時は各藩とも藩内に親徳川派と討幕派の二派に別れていて藩論が統一出来ていない藩が沢山あったのである。

●慶応三年の動向

揺れ動く土佐藩の動向を下記にご案内する。武力討幕派と公武合体派が交互に揺れている。乾退助が邪魔だからアメリカに派遣する内命がでたとか、乾退助の進退はめまぐるしく変動している。驚くこと

揺れ動く土佐藩の慶応３年後半の動向

・８月20日、山内容堂が後藤象二郎の献策による大政奉還を幕府へ上奏する意思を示す。

・藩庁は、大政奉還論に反対する乾退助にアメリカ派遣の内命を下し、政局から遠避けようと画策。

・８月21日、乾退助が、土佐藩御軍備御用と兼帯の致道館掛を解任される。

・９月３日、京都で赤松小三郎が門下生・中村半次郎、田代五郎左衛門によって暗殺される。

・９月14日、土佐藩(勤王派)上士・小笠原茂連、別府彦九郎が、江戸より上洛して、京都藩邸内の土佐藩重役へ討幕挙兵の大義を説く。

・９月20日、坂本龍馬が、長州の桂小五郎(木戸孝允)へ送った書簡の中で「大政奉還」を幕府の権力を削ぐための大芝居とし、その後、武力討幕を行わねばならないが、後藤象二郎が大政奉還のみで止まり討幕挙兵を躊躇った場合は、乾退助に接触し後藤を捨てると述べている。

・９月22日、中岡慎太郎が『兵談』を著して、国許の勤王党同志・大石円に送り、軍隊編成方法の詳細を説く。

・９月24日、在京の土佐藩(佐幕派)上士らが、幕吏の嫌疑を恐れて白川藩邸から陸援隊の追放を計画。

・同日、坂本龍馬が、安芸藩・震天丸に乗り、ライフル銃1000挺を持って５年ぶりに長崎より土佐に帰国。浦戸入港の時、土佐藩参政・渡辺弥久馬(斎藤利行)に宛てた龍馬の書簡が残っている。

・９月25日、坂本龍馬が、土佐勤王党の同志らと再会し、討幕挙兵の方策と時期を議す。

・９月29日、乾退助が、土佐藩仕置役(参政)兼歩兵大隊司令に任ぜらる。

・10月８日、乾退助が、土佐藩歩兵大隊司令役を解任される。

さらに、後藤象二郎の献策による大政奉還論が徳川恩顧の土佐藩上士の中で主流を占めると、過激な武力討幕論は遠ざけられたが、退助は大政奉還を批判して建言。

しかし、容堂は「退助また暴論を吐くか」と笑って取り合わなかった。

乾は大政奉還論に真っ向から反対する意見を貫いたことで全役職を剥奪され失脚した。

10月13日、中山忠能、正親町三条実愛、中御門経之連署の討幕の密勅が薩摩藩に対して下される。

10月14日、同文同意の討幕の密勅が長州藩へ下され、同日、徳川慶喜が大政奉還を行う。

10月15日、大政奉還が御嘉納あらせられる。このため「討幕の密勅」はその名目を失い『討幕実行延期の沙汰書』が10月21日に薩長両藩に対し下された。

10月18日、武力討幕論を主張し、大政奉還論に反対する乾退助を残し、土佐藩(勤皇派)上士・山田清廉、渋谷伝之助らが兵を率いて浦戸を出港。しかし、この時「もし京都で戦闘が始まれば藩論の如何に関わらず、薩土討幕の密約に基づき参戦し薩摩藩に加勢せよ」との内命を乾退助より受ける。

10月19日、大政奉還論に反対したことにより乾退助が、土佐藩仕置役(参政)を解任され失脚。全役職を解任されて失脚した退助は、京都で合戦が始まれば、薩土討幕の密約に基づき国許の勤皇派同志 数百名と共に脱藩して武力討幕の軍に加わるため、脱藩決意書をしたためた。

この乾退助による、勤皇派藩士集団脱藩計画は、実行寸前のところで、最終的には土佐藩自体が退助の失脚を解いて盟主に奉りあげ、正規の軍隊として迅衝隊を組織し出陣することになる。

11月、坂本龍馬が大政奉還後の新政権設立の為の政治綱領『新政府綱領八義』を示す。

11月10日、坂本龍馬が由利公正へ新政権樹立にあたり上洛を促す書簡を送る。

11月15日、京都の近江屋において、坂本龍馬、中岡慎太郎らが襲撃され、龍馬は同日落命。従士の藤吉は翌11月16日亡くなり、慎太郎は瀕死の中で、暗殺犯が襲撃した状況や特徴について谷干城らに詳細を語った。また、乾退助に対しては「幕吏の手が迫っている。潰される前に(討幕を)早くお遣り下さい」という言葉を託し、11月17日逝去。11月18日(太陽暦12月13日)、土佐藩京邸の同志たちによって京都東山の霊山(現・京都霊山護国神社)に埋葬される。

は軍政改革の責任者に任命されたり解任されたり、挙句の果てに乾は脱藩して討幕軍に加わる計画をしていた。土壇場で乾は復帰して土佐藩正規軍の迅衝隊を率いて出陣することになった。それに坂本龍馬が藩を超えて、新政権に発言力が増していることも上記の資料から鮮明になっている。これに気が付いた土佐藩の上層部は何を思ったであろうか？

龍馬暗殺犯は？

●慶応三年十月、寺村道成の日記によれば、京都の某所で会津藩の京都守護職の現場責任者の手代木直右衛門（てしろぎすぐえもん）と寺村道成（公武合体派）が観劇の席で会談を行ったという。その手代木の実弟が龍馬暗殺犯の首謀者佐々木只三郎だと言うからこの会談はおだやかでない。土佐藩と会津藩の家老が会談した内容は会土密約であると沢田氏は言う。その内容こそ土佐藩が会津藩に龍馬と慎太郎を暗殺するよう依頼をした可能性があるという。それを裏ずけるのが寺村道成と会津藩の手代木直右衛門の会談と「巨魁二人」と書いた寺村道成の日記なのだが、流石に暗殺犯土佐藩説は高知市内では発表できまい。

誰が藩旗を？

●鳥羽伏見の戦で一体誰が土佐藩の藩旗を挙げたのか？沢田氏の説は「樋口真吉をおいて他にいない」という説だが、下の資料では通説が紹介されている。真吉説が通るには今一つ確定的証拠が欲しい。乾退助の居ない現場で乾の指示を順守して、独断で動いた山田、吉松の部隊長が切腹を覚悟したが、錦旗が翻り事なきを得たと書かれている。何とも最後まで容堂公の迷走振りに振り回された土佐藩であった。その中で終始一貫した乾退助の討幕一辺倒、薩土密約遵守の姿勢が土佐藩を救ったように見えるが、その背後に間崎滄浪の顔も見える。その意味では間崎滄浪をもっと評価していい気がする。

安積 艮斎（あさか ごんさい、寛政3年3月2日～ 万延元年11月21日）

幕末の朱子学者。江戸で私塾を開き、岩崎弥太郎、小栗忠順、栗本鋤雲、清河八郎らが学んだ他、吉田松陰にも影響を与えたとされる。

薩土密約の履行

1月3日、鳥羽伏見で戦闘が始まると、山内容堂は在京の土佐藩兵に「此度の戦闘は薩摩・長州と会津・桑名の私闘であると解するゆえ、何分の沙汰ある迄は、此度の戦闘に手出しすることを厳禁す」と告ぐが、

山田清廉、吉松速之助、山地元治、北村重頼、二川元助らの諸隊は藩命を待たず、薩土討幕の密約に基づき独断で戦闘に参加。(澁谷隊は迷った末、藩命を遵守して参戦せず)

その結果、山田清廉、吉松速之助らは勝利を挙げるが切腹を覚悟し、北村重頼率いる砲兵隊は、妙法院に呼び戻され、厳しく叱責を受ける最中、錦の御旗が翻り、藩命違反の処分が留保される。

1月4日仁和寺宮嘉彰親王が、朝廷より錦旗と節刀を賜い、征討大将軍の命を拝して皇軍総裁となる。

1月6日谷が土佐に到着し、京都の状勢を伝える。

1月7日徳川慶喜が「朝敵」として討伐の勅が下る。

1月8日乾退助の失脚が解かれ土佐藩仕置格(参政)に復帰。翌1月9日藩兵の大隊司令に復職。

土佐藩は深尾成質を総督、乾退助を大隊司令として迅衝隊を編成し、藩校・致道館より出陣。

戊辰戦争に参戦した。

江川太郎左衛門

●万次郎は帰国後土佐藩の定小者として士分に登用されていたが、ペリー来航の年、林大學頭は万次郎を老中安倍伊勢守正弘に推薦した結果、土佐藩江戸屋敷留守居役に万次郎を呼び寄せるように命じた。幕府が万次郎を幕府直参に登用することになったのである。

近々来航が予定される米国の事情を少しでも知っておきたい思惑があった。嘉永六年八月三十日に江戸に到着した万次郎は、早速に幕府から呼び出され、老中安倍正弘や江川太郎左衛門らのアメリカについての質問に答えた。万次郎の応答が的確で的を得ていたので一同を満足させたと言う。江川太郎左衛門は願い出て、万次郎を自分の屋敷に住まわせ万次郎から情報を得たという。ペリー来航時に通詞として万次郎を準備したものの幕府は結局その案を採用しなかったが、幕府は万次郎が米国に有利な通訳をするのでは？と疑心暗鬼になったからだと伝えられている。ペリーは万次郎の帰国を知っており、万次郎との対面を期待したが叶わなかった。

伝記「中浜万次郎」（中浜博著）にはふすまの陰で、米国側の話を訳して伝えていたとの話が紹介されている。

●江川太郎左衛門は砲術家として知られ外交に詳しく、高潔な人格者であった。その後万次郎の結婚相手を江川太郎左衛門が世話をしている。この砲術家に五年間も仕えたのが樋口真吉の愛弟子の山崎慎六郎である。山崎慎六郎は真吉の教え子で、嘉永五～六年の真吉との旅を終えたのち、新ためて単独で江戸に行き、砲術を勉強しているが、その折に江川太郎左衛門に五年間奉職しているのは万次郎の斡旋かもしれない。彼は帰国後文武館の教壇に立ち、中村の後輩の教育に尽力している。幕末の激動の時代に幡多からかくも立派に活躍した先輩たちがいたことを忘れてはなるい。

真吉従四位追贈

●樋口真吉は文化十二年（1815）十一月八日幡多中村に生まれ、明治三年（1870）六月十四日東京麻布にて没した。享年五十六歳であった。生前に戊辰戦争に於ける叙勲従七位を授与されたが、明治三十六年特旨を以て従四位が追贈された。その前年、真吉の愛弟子の桑原戒平著「樋口先生」（真吉没三十回忌に出版）が出版され、改めて樋口真吉に思いを寄せる機運が真吉の評価を見直す契機になり、当時存命中の佐々木高行の推挙もあったと想定される。為松公園二の丸に建立された「贈従四位樋口船影記念碑」は、海軍大将男爵島村速雄の揮ごうによるものである。本年は樋口真吉没百五十年祭を行ったが、この従四位への追贈の裏には土佐藩独特の門閥評価を覆した意味がある。

★以上沢田勝行理事の講演からダイジェストレポートしました。

十一月七日顕彰会総会

●【定期総会】コロナ禍の中、定期総会を開催、来賓挨拶の後、広島県廿日市市貫汪館森本邦生先生に記念講演をして頂いた。

●樋口真吉の佩刀拝見　木戸薬局のご当主のご厚意で大石神陰流免許皆伝の森本先生に真吉の佩刀と鉄扇などの遺品をご披露して頂きました。

驚きは真吉の刀の長さで、柄の長さも長く常人にはとても実践で扱えないほどの長刀でした。真吉の背丈は六尺はあったのでは？

●不破八幡宮奉納演武　十一月八日不破八幡宮境内で、貫汪館館長森本邦生氏と林大介氏によって大石神陰流演武を奉納、その後体験会を行い、古武道の魅力を実体験しました。

編集後記

●【新年度理事会】新年度の事業計画の骨格を決定しました。

○樋口真吉の銅像建立基金を設置して銅像建立を具体化すること、

○地元中高生に、地域の偉人の生き方を通じて歴史を学ぶ方策を提案し実施すること、

○樋口真吉を顕彰するため真吉の足跡を辿るツアーを立案実行して、樋口真吉への理解を深める事業を実行することその三事業の財政を支援するため、毎号会報誌に広告ページを設けて、通常会費と別に事業協賛金を募る仕組みを設けました。ご協力方よろしくお願い致します。

●【定例行事予定】

○六月十四日墓前祭

○十一月三日　樋口真吉杯剣道大会

○十一月六日　樋口真吉顕彰会総会